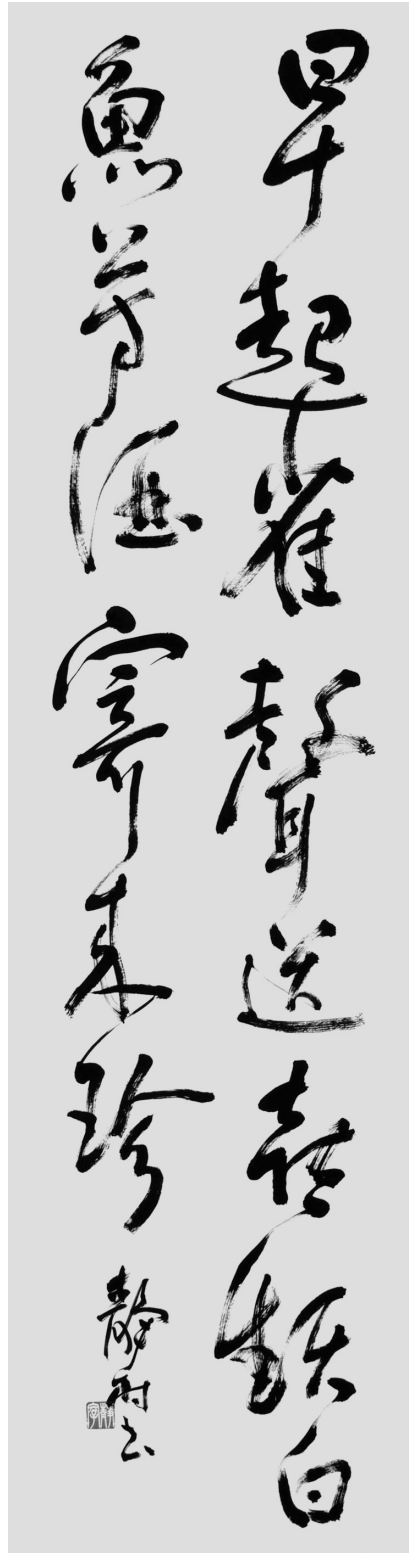


A

鈴木静村書

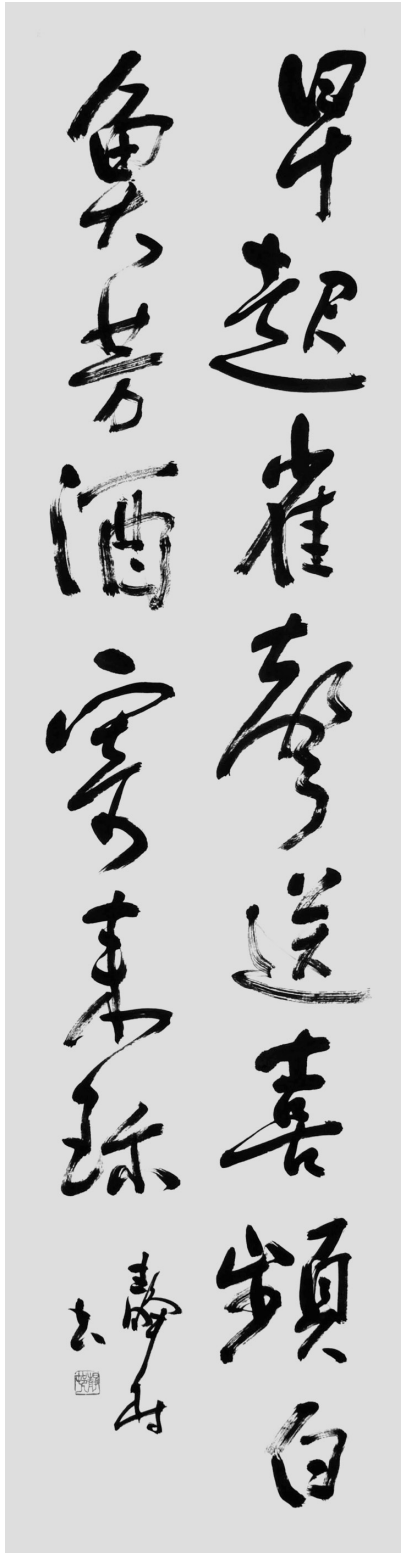
早起雀聲送喜頻 白魚芳酒寄來珍 (徐童)  
早起雀声喜を送ること頻に、白魚芳酒寄せ来りて珍なり。



B

概観

A、濃墨が過ぎた感じ、ただ一気に連綿を多くしてみた。タテの流れが基調になることは前にも何回か触れている。息を十分に吸い、少しずつ吐きながら書く練習をしてほしい。その際の留意点は、連綿線をそっくり真似るのではなく「気脈のつながり」にポイント。B、単体が主。ただ気脈のつながりはA作と同じ。



主な文字について

起 「走によう」によって字幅。雀 A一画目連綿で甘くなりやすい留意を。声 B草書「耳」はかな「う」が覚えやすい。喜 墨継ぎ。頻 墨継ぎ。魚 B四点を「大」に。酒 A覚えてほしい草書。寄 墨継ぎ、A行書の「寄」古典に多い。珍 「珍」古典に多い。は楷・行書もこの形。

訳：朝早く雀の声がしきりに吉報を送ってくる。果たして珍しい白魚と芳酒とを頂戴した。

予告 (八月二十二日締切)

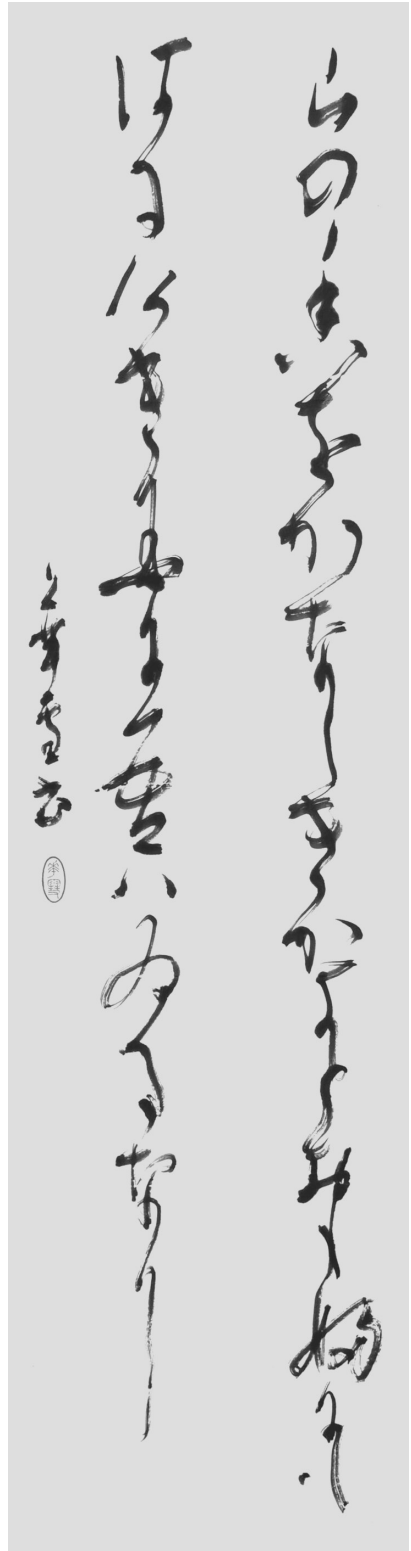
小齋高接萬林杪 坐見城南城北花 (范曄)

- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点 (バーコード券の条漢を○で囲み(1)と記入する。)
  - ・二枚目からの出品 (バーコード券の条漢を○で囲み( )に何枚目か数字を記入する。出品料500円)

A

平岡華雪先生書

山の香をかなしきかなと思ふにも遙けき國に吾はゐるなり(斎藤茂吉)  
山の香をかなしきかなとおも婦尔もはる介き国尔吾八ゐるなり



B

石原春香先生書

山の香越可奈しきかな那とお无ふる毛者遣き國に王連八ゐるなり



学 び 方

A、一行目の字幅によるゆれのこちよさ。二行目は華雪先生の意としたところか直線上にゆれを感じさせない書きぶりです。「国尔」の直線がそう見せているような気がします。「吾八ゐるなり」は明るくなっている。「国尔」でちょっと動いたらと思います。この作品は墨量も始めからしばって書き出し気持の思うままに一気に書いたのではないのでしょうか。古典も真筆を見る大切さを感じます。折にふれ華雪先生のこれらの作品を直かに拝見したいと思います。写真では感じとれない感動があると思います。

予告 (八月二十二日締切)

ひぐらしのなく山里の夕暮は風よりほかに訪ふ人もなし (古今和歌集)

B、漸増漸減を考えながら一行目と二行目の響き合い。墨量の変化、潤濁は常に頭に入れてどんな景色に仕上げるかでの時の作品のよしあしがまります。技術的には一つの文字の中で筆圧の変化、特に渴筆の中での線の変化を勉強して下さい。「お无ふ」は古典の中の表現です。

- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点(バーコード券の条かを○で囲み(1)と記入する。)
  - ・二枚目からの出品(バーコード券の条かを○で囲み( )に何枚目か数字を記入する。出品料500円)

平岡華雪先生書

山晴れて石路香し (李建勳)

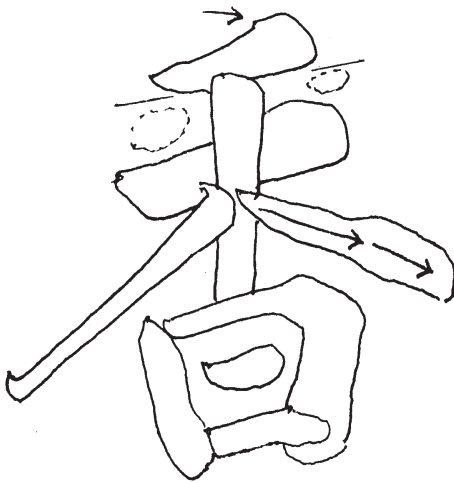
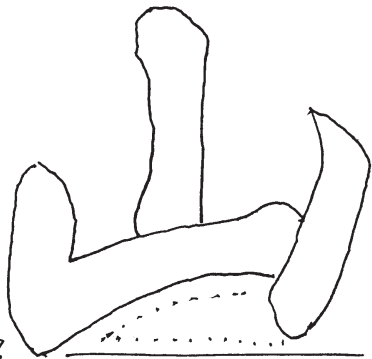
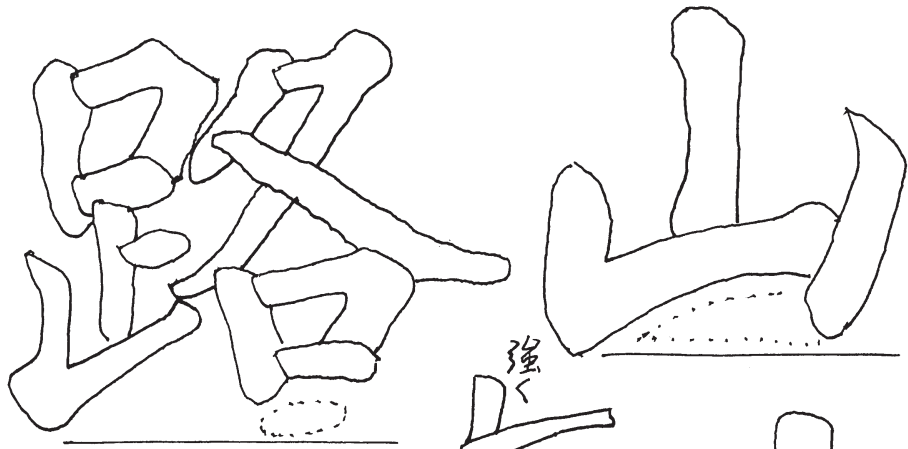


訳：山が晴れて石の路に香りが漂っている。

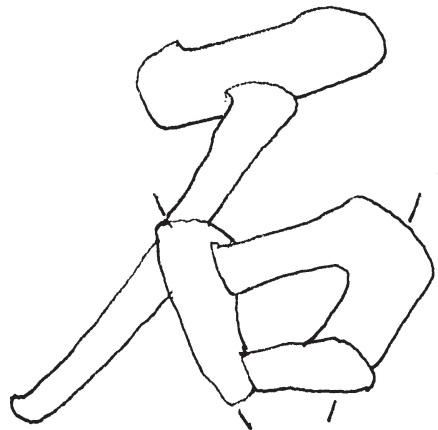
▼注意：…はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。

- ① 漢字部
- ② 支部名または都道府県名
- ③ 氏名または雅号
- ④ 新

会員は無料、会員外出品料は四〇〇円。



夕  
夕長

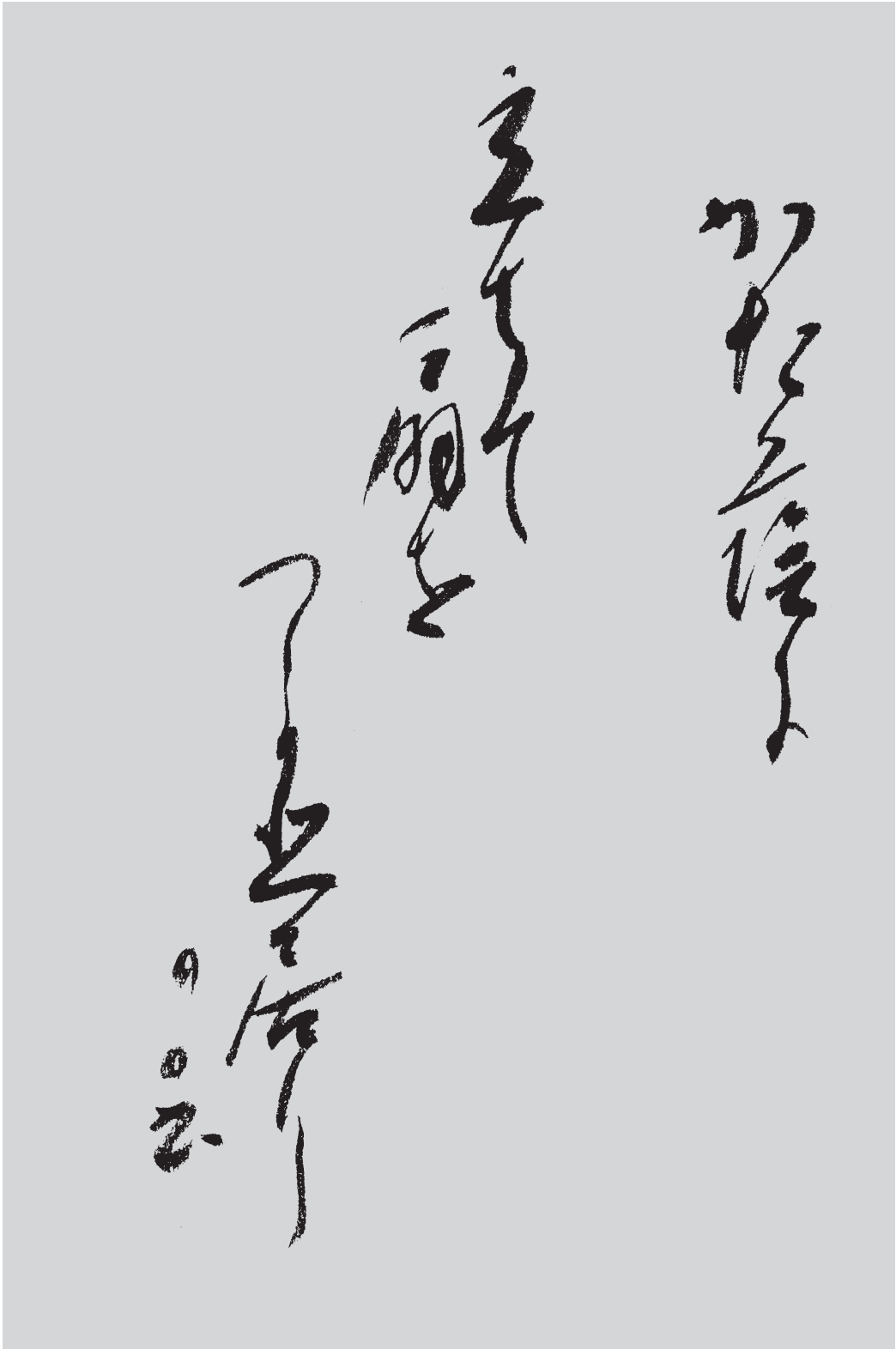


左折、三画のこゝ

「石」の二画目、香「田」画目。  
前者は太の直線的、後者は  
細めの直線的。両者共鋭く滑  
り線。中筆の鋒をよりのこ  
り画へ。他の「香」の第一画、  
ポイントに鋭い解懸濟けを多  
す。

平岡華雪先生書

片陰に立ちて扇をつかひをり(鼓天)



▼注意……はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。

- ①かな部
  - ②支部名または都道府県名
  - ③氏名または雅号
  - ④新
- 会員は無料、会員外出品料は四〇〇円。

初歩段階者  
 名例の全連綿

この課題も筆意を主とし、時折試みられる各行全連綿の作。

漢字を各行に配してポイント化を図る。その意味は漢字の融合が注目点の一つ。特に「陰、月、則」の草略、「可、悲」の交代的なには、より習熟を望むたい。初歩段階にとつては、この各行連綿の手法は、連綿技法のアップに効果の利点大きい。腕を磨いてほしい。

「  
筆意を

遠山雪軒先生書

對酒燭分花底夜 出簾香散竹間風（華幼武）  
 酒に對して燭は分る花底の夜、簾を出て香は散ず竹間の風。

對酒燭分花底夜  
 出簾香散竹間風

訳：花下で酒飲むときは一灯を数人で擁して影を分つ、竹間の風が香を散ずるのは簾をでる時である。

高山小玉先生書

ゆふだちの雲間の日かげはれそめて山のこなたをわたる白鷺（玉葉和歌集 藤原定家）  
 夕立の雲間の日可希者れ所め天山能こ那多を渡るしら鷺

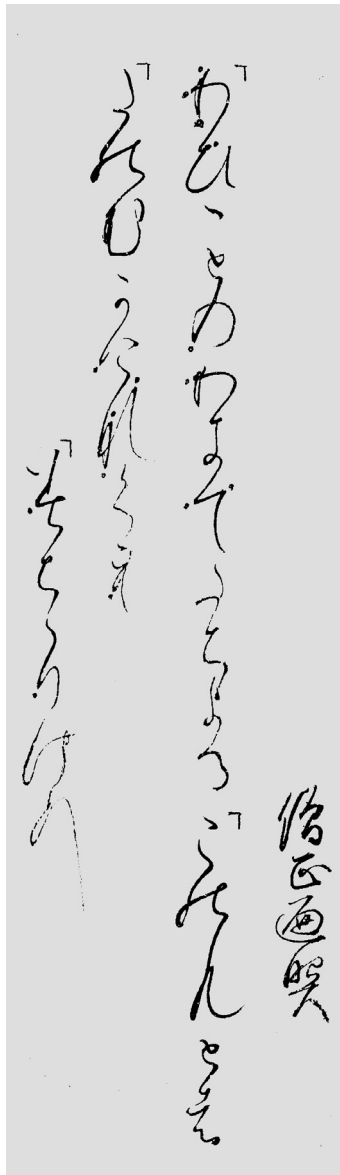
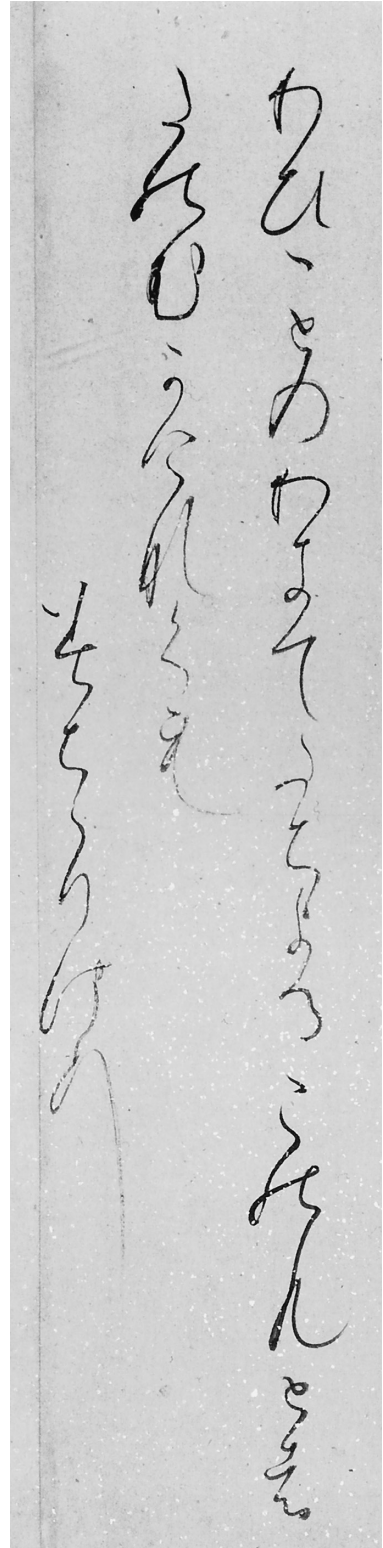
夕立の雲間の日かげはれそめて山のこなたをわたる白鷺  
 夕立の雲間の日可希者れ所め天山能こ那多を渡るしら鷺

- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点（バーコード券の条随を○で囲み（1）と記入する。）
  - ・二枚目からの出品（バーコード券の条随を○で囲み（ ）に何枚目か数字を記入する。出品料500円）

# 題 課 部 書 臨 幅 条

川上香蓉先生担当 高野切第二種 伝紀貫之筆(二玄社)

※条幅臨書部は出品料無料です。



傳正遍照

「わび、とわきてたちよる木の  
もとは、頼むかけなく紅葉ちり  
けり」  
「わび、とわきてたちよる木の  
もとは、頼むかけなく紅葉ちり  
けり」

「わび人のわきてたちよる木の  
もとは 頼むかけなく紅葉ちり  
けり」  
わび、とわきてたちよるこの  
もとは、たのむかけなくもみちり  
りけり

△構成・墨継ぎについて▽

今月の歌は古今集第五巻・秋歌下に出て来る僧正遍照の歌です。墨継ぎの箇所は四ヶ所。一行目と二行目の頭で墨継ぎがあり、上部に重さが片寄って見えますが、第五句(正確には二字目からの六文字)を三行目に持って行きバランスを取っています。また原帖を見ればこの歌の作者「僧正遍照」を墨量豊かに書くことで下方もバランスよく引き締めています。(左側の解説写真参考)行間はゆとりをもって明るい感じがします。「高野切」で

は珍しく三行書きで、特に最後の「けり」はかなり大胆に書き放っています。

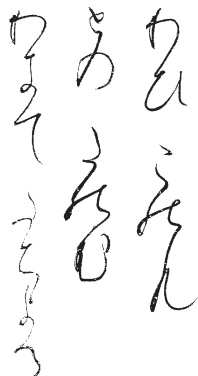
遍照(へんじょう)

八一五年〜八九〇年 俗名良岑宗貞

父は桓武天皇の皇子で臣籍に下った大納言良岑安世。八四九年蔵人頭に任ぜられ、翌八五〇年従五位上に叙せられたが仁明天皇の崩御に遭い、悲嘆の余り出家。八八五年僧正になった。貞観年間に京都山科の花山に元慶寺を創建し、座主となった。家集に遍照集がある。

△連続▽

強い連続線



細い連続線

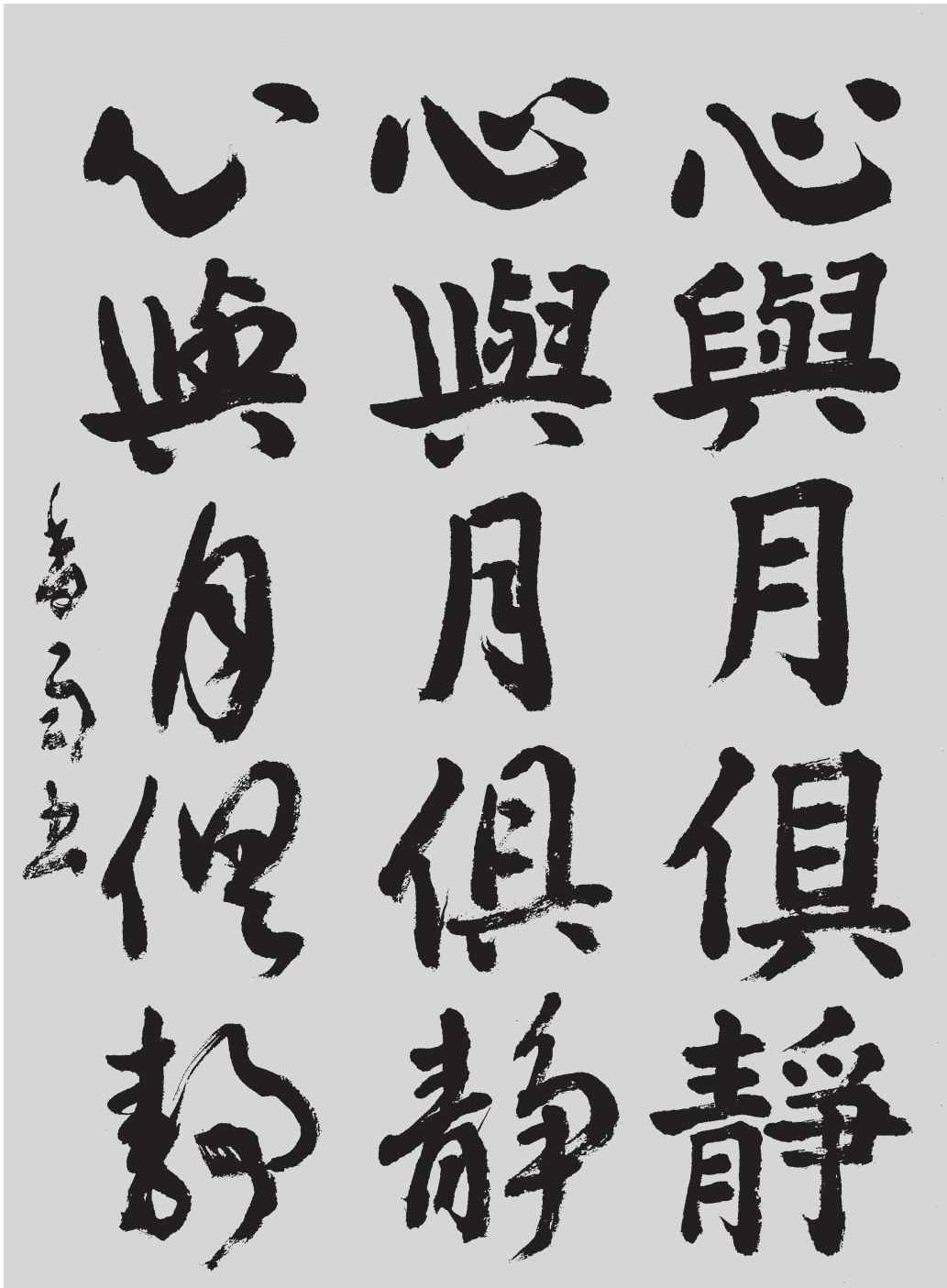


◆注意 ・条幅臨書部の出品はバーコード券右空欄に条臨と記入する。



酒井香雨先生書

心與月俱靜（李調元）  
心は月と俱に静。

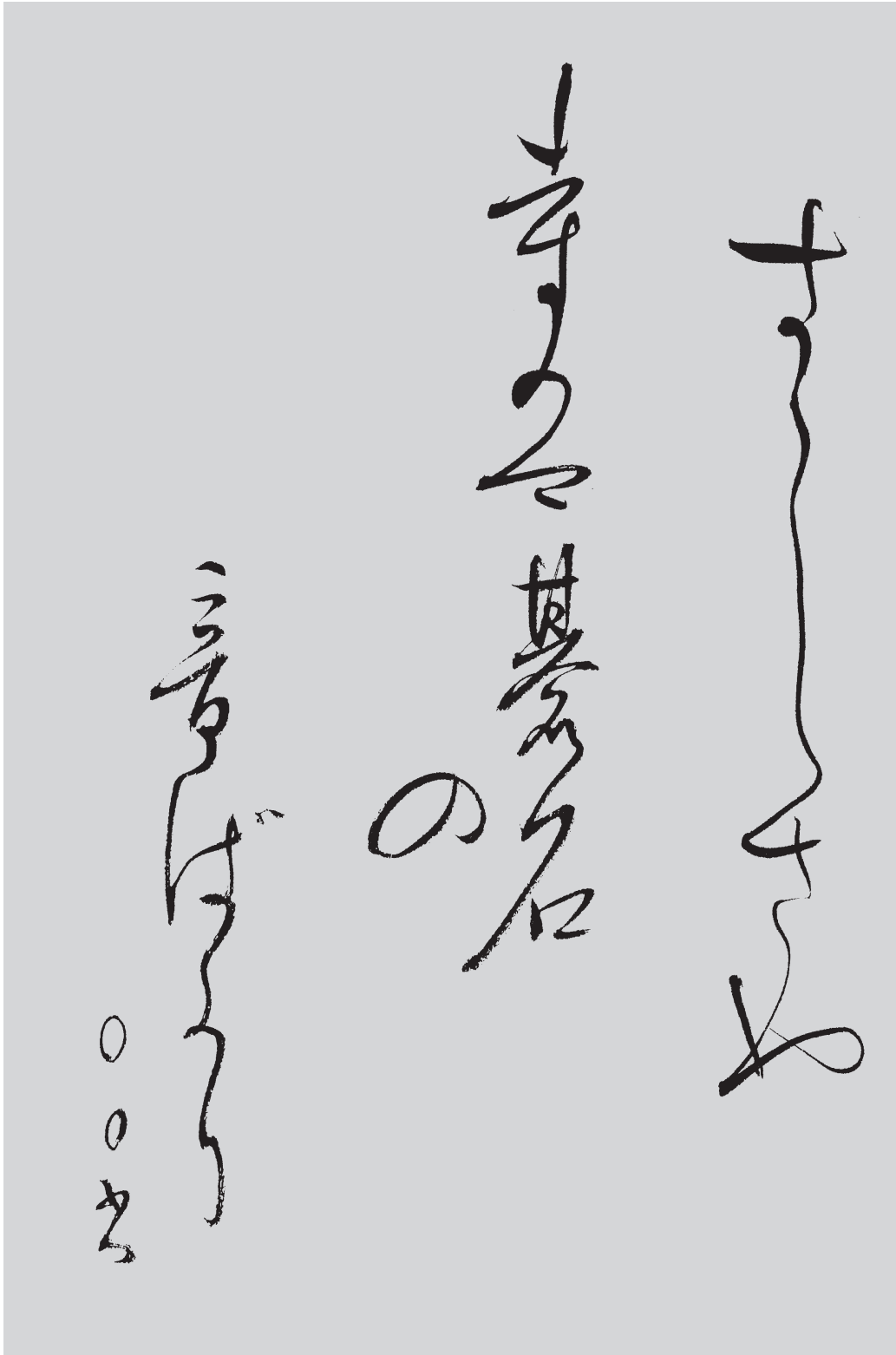


訳：我が心は空に静かに澄む月と共に静かである。

1. 随意部参考として出品してください。
2. 会員外の出品料は400円。

高塚竹堂先生書

涼しさや寺は碁石の音ばかり(蓼太)



◆随意部参考として出品してください。

星野春陽先生書

水退池上熱 風生松下涼 (李白)  
水は退く池上の熱、風は生ず松下の涼。

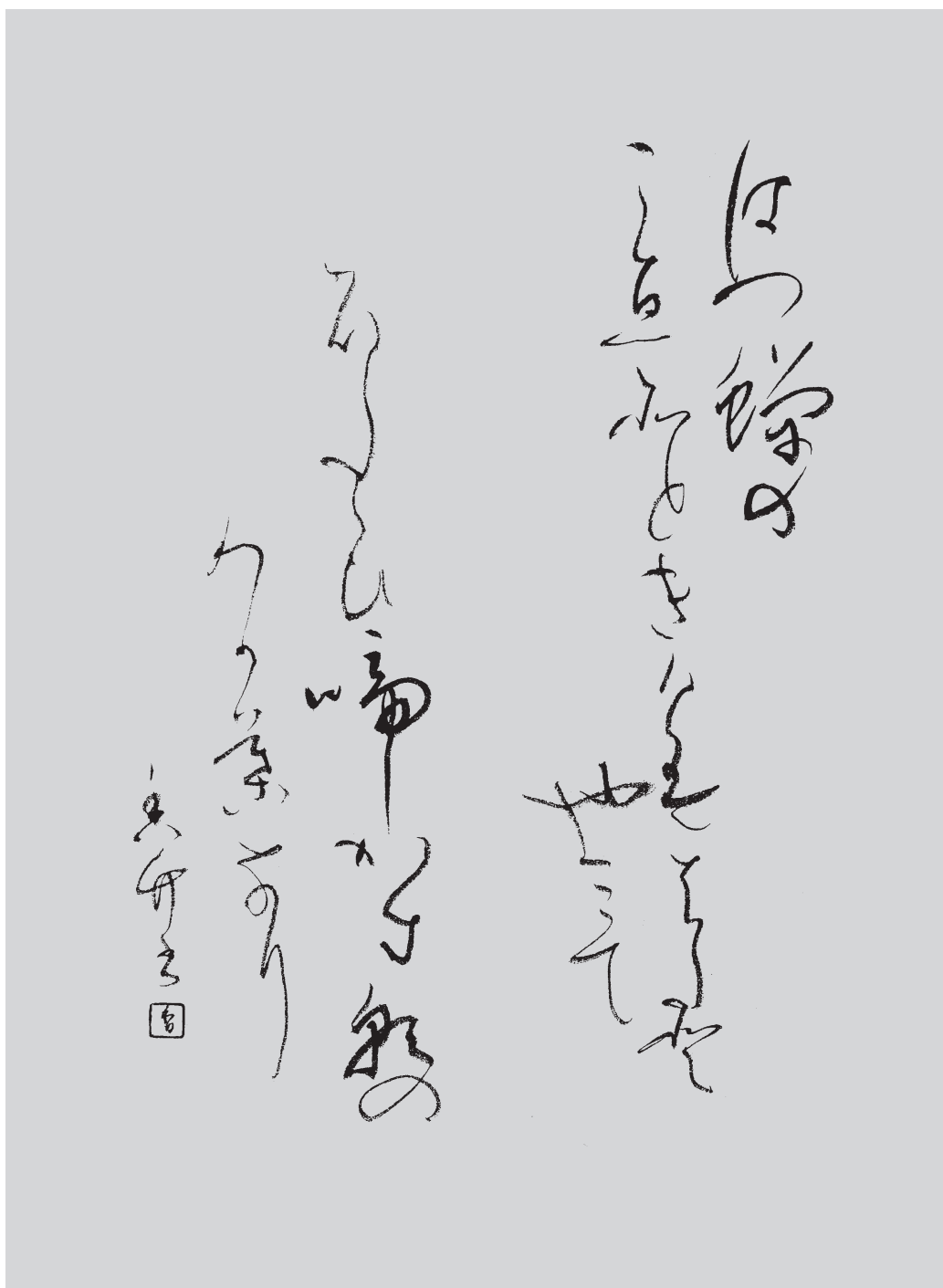


訳：池の水は池上の熱気をさまし、風は松下を渡って涼気を生ぜしめた。

添削又は手本希望者は本会規定により、星野春陽先生（〒143-0024 大田区中央6-21-23）に直接お申し込みください。

青柳香竹先生書

はつ蟬はつせみのこゑぞときけばはたとやみてふたたび啼なかず朝あさの若葉わかばなり（土岐善麿）  
はつ蟬のこゑ所ところとき介け盤者多登はたや三みて不ふ多た、ひ啼なかず朝あさのわ可葉わか奈なり



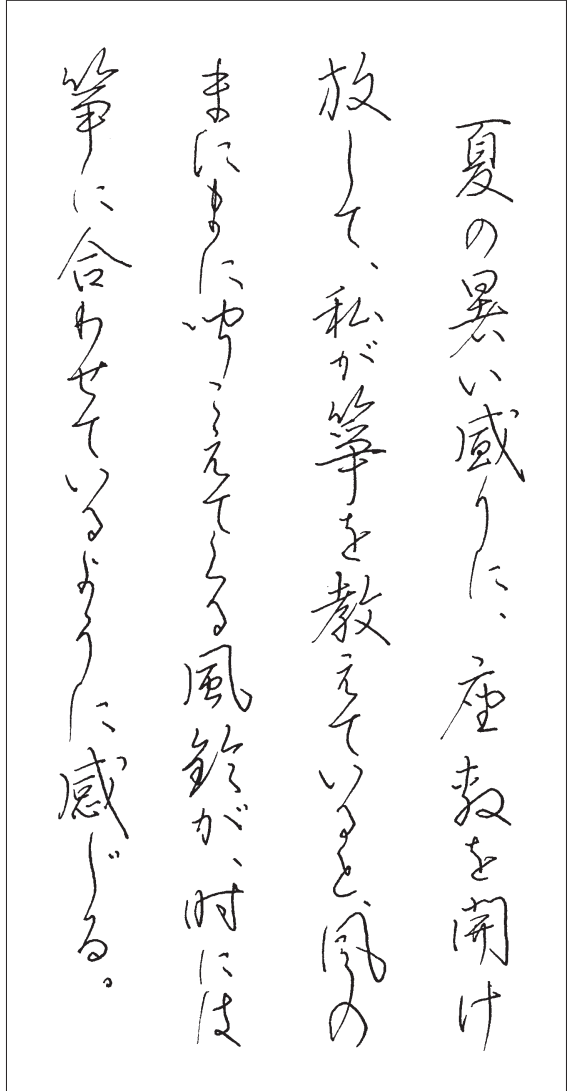
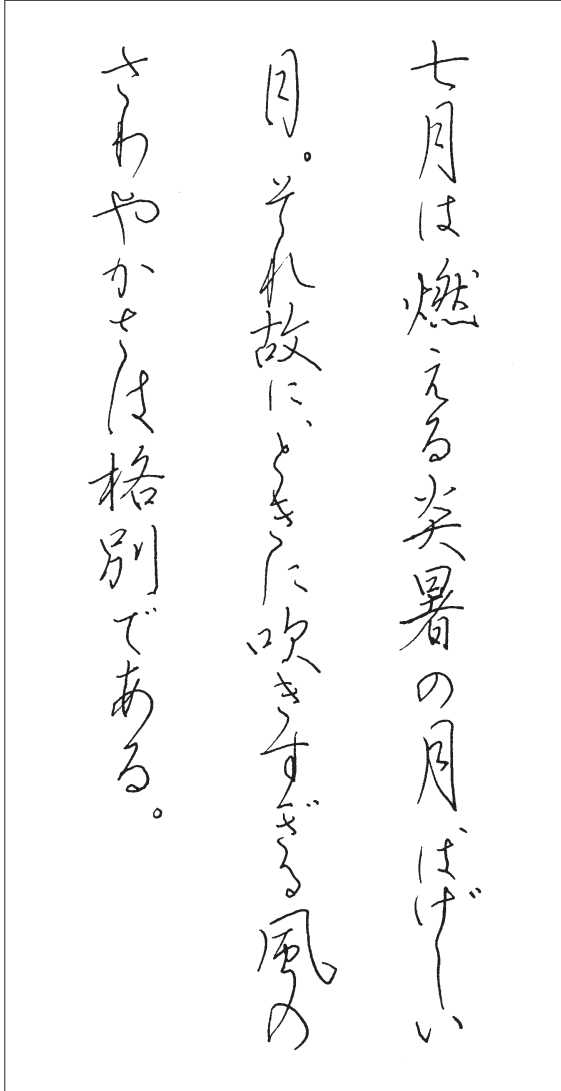
添削又は手本希望者は本会規定により、青柳香竹先生（〒205-0001 横浜市青葉区美しが丘西3-30-4）に直接お申し込みください。

路川千曄先生書

路川千曄先生書

課題2 (初段格以下)

課題1 (初段以上)



課題1 (初段以上)

夏の暑い盛りに、座敷を開け放して、私が箏ゴキウを教えていると、風のまにまに聞こえてくる風鈴が、時には箏に合わせているように感じる。

「風鈴」宮城 道雄

◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。ペンまたはボールペン(黒色)を使用のこと。青インクは不可。
- (2) 段級欄は本人が記入(色は黒)はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位) 次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (3) 会員は無料・会員外は四〇〇円
- (4) 添削希望者は直接担当の先生にお申込下さい。(返信用封筒に自分の住所・氏名を記入し、切手を貼って同封のこと)。
- (5) 課題1 六〇〇円
- (6) 課題2 三〇〇円

課題1 路川千曄先生  
課題2 千二〇七〇〇一三

課題1 路川千曄先生  
課題2 千二〇七〇〇一三

東大和市向原

五ノ一〇九一ノ四

課題2 (初段格以下)

七月は燃える炎暑の月、はげしい月。それ故に、ときに吹きすぎる風のさわやかさは格別である。

「季節のかたみ」幸田 文